序章

中国学（Sinology）という分野は近年目覚ましく変貌を遂げた。とりわけて民俗学・宗教学での新しい研究は、それまでの研究領域と方法のあり方に大きな変化を齎らした。中国古典研究の方面でも内外に変化は見受けられる。しかしながら、中国で「旧詩」と呼ばれる伝統的な詩文学の領域においては、聞一多や銭鍾書のような近代的な学風も個人の範囲に止まり、学界全体を通じてのドラスティックな変化は見当たらないと言ってよいだろう。取り分けて唐代の詩篇は、中国でも日本でも人口に膾炙しただけに、研究の対象としての客体性よりも、鑑賞の対象として親しまれた「馴染み」の方が強く、研究者の間にもその影響が蔓延していて、根元的な疑問の出にくい状況があったと言えよう。一例を挙げれば、中国では『唐詩三百首』が、また我が国では李攀龍『唐詩選』が、それぞれ唐詩を読む入口に位置していたが、それぞれの国民はそれらの書物の出自と実態への疑念について、歴代の碩学と雖も判断を停止していた。そこからして、唐詩の読み方、ひいては文学史の読み取り方に、一種の伝統的な「偏り」が生じていたと言える。その由って来る最大の原因は、中国における王朝交替に伴う思想や趣味の変化、或いは前王朝・前政権に対する無理解や偏見が、種々の形で文化の本質を歪めてしまったことに在るのであろう。

唐代の文化は、煎じ詰めれば玄宗李隆基の治世に集約されるであろうが、この政権がそれ以前の則天武后から太平公主に至る女性政権とそれに連なった人士にどれほど深い敵意を抱いていたかは、文学史を考える上で極めて重要な時代背景なのだが、これまで殆ど顧慮されていないと言えるだろう。

古い時代の文学を考察するに当たって研究者は、現代に残された資料を以て十全なものと考えてはいけない。喩えてみれば、大半のピースが永久に失われたジグソーパズルの原画を再構成するようなものであって、そのピースがどこに位置するものか、ひとつの線がどの線の延長上にあるかを慎重に瀬踏みする必要がある。この

ことは立前としては解ってはいるのだが、長い伝統の中で内外の研究者ともども、唐詩の世界には一定のイメージが出来上がってしまっていて、自己完結した領域からなかなか抜け出せないでいると言って過言でなかろう。

いうまでもなく、唐代の詩篇がオリジナルで現存するものは、敦煌写本などの例外を除いて極めて稀であって、多くのテキストは宋元の人々のコピーを、明清の人々がコピーして刊行したもの、或いはそれらの近年のコピーで読んでいるに過ぎない。そこにはコピーを重ねる回数だけその時代の思想や趣味による歪みが重畳されてゆくことになるのである。

さらに重要なことは、詩の解釈ということになると、中国の伝統的な注釈の学は、時代によってその観点を変化させてゆき、決して原点に戻ることはない。原点というのは唐代の人々自体がどう読み取っていたかということである。現在の唐詩の解釈は多くの場合、宋元に最も古い注釈があり、それに明清の人々が「加上」したものが後世の研究者によって祖述されたものである。無論、そのいくつかは正鵠を射たもの、乃至は妥当なものであるのだろう。しかしながら、小冊のいくつかの章で論ずるごとく、唐を代表する詩人の根元に関わるような詩あるいは語の解釈が、まともに注釈されていないと思われる箇所がいくつかあるのである。それはつまり遠くの或いは近くの先学が行った解釈が、以後数百年以上も改められずにいるということである。そして、清朝における乾嘉の学による旧学の整理・統制以来、その影響は、近代的な学に脱皮できぬまま今日まで及んでいると言ってよいであろう。

小冊は、残念ながら唐詩全般に渡って従来の研究の問題点を体系的に見直したものではない。僅かに数人の詩人研究にメスを入れて問題を指摘したに過ぎない。しかしながら、小さな一歩であっても何らかの意義のある一歩というものもあるのではないかと、ひそかに期するものがある。博雅の御叱正を待ちたい。

各章の基となる論文の初出を以下に記す。

第一章第一節＝關西大學中國文學會紀要第十三號（平成四年三月）
第一章第二節＝關西大學文學論集第四十六巻第三號（平成八年十二月）
第二章第一節＝關西大學文學論集第三十八巻第三・四合併號（平成元年三月）
第二章第二節＝關西大學文學論集第三十九巻第三號（平成二年二月）
第二章第三節＝關西大學中國文學會紀要第十六號（平成七年三月）
第二章第四節＝關西大學中國文學會紀要第十一號（平成二年三月）
第三章第一節＝入矢教授小川教授退休記念中國文學語學論集（昭和四十九年十月）
第三章第二節＝關西大學文學論集第三十一巻第三・四合併號（昭和五十七年三月）
第三章第三節＝日本中國學會報第二十八集（昭和五十一年十月）
第三章第四節＝集刊東洋学第六十六号（平成三年十一月）
第四章第一節＝東海学園国語国文第十四号（昭和五十三年十月）
第四章第二節＝東海学園国語国文第十一号（昭和五十二年三月）
附論第一節＝立命館文學第四三〇～四三二號（昭和五十六年六月）
附論第二節＝關西大學文學論集第三十四巻第一號（昭和五十九年十一月）
附論第三節＝關西大學文學論集第四十三巻第二號（平成五年十二月）

（平成十年一月二十二日記）

第一章　初唐詩研究

第一節　陳子昂「薊丘覧古」について

はじめに

陳子昂（六六一―七〇二年[1]　字は伯玉）は、初唐武后期に生を享けた。南朝斉梁から初唐前半に至る〝奇麗〟を旨とする詩文学を、続く玄宗朝における〝盛唐の気象〟へと転換した革新の詩人として知られる[2]。杜甫はその人柄と文学を慕い、梓州（四川省三台県）に滞在した際、射洪県に詩人の故宅を訪れ、さらに雪中を金華山なる学堂にその青雲の志を検して、それぞれ詩を残している[3]。杜甫が陳子昂という詩人に強くひかれるところがあったのは、単にその為人と作品に共鳴したというに止まらない。杜甫の祖父杜審言が則天武后にその文才を見出され奉仕していたとき、武后が常住した洛陽に近い嵩山に遊んだ「方外の十友」の一員として陳子昂と深い交わりを結んでいた[4]。杜審言が左遷されて吉州司戸参軍に赴任する際に「送吉州杜司戸審言序」を四十五人の友人の詩文に冠して贈っているのも陳子昂である。杜甫にとって陳子昂という人物は、幼少の頃から彼の人生の手本として意識されていたのではないだろうか。官職から見ても、杜甫は天宝十四載（七五五年）四十四歳にして初めて右衛率府兵曹参軍の職に就いているが、陳子昂もかつて右衛胄曹参軍の職にあり、のち三十三歳で右拾遺に抜擢されている。杜甫が粛宗の行在所に馳せ参じた功績によって得た官が左拾遺であることは暗合以上のものを感じさせる。戦乱の中に唐朝を去って流浪の旅の途次陳子昂ゆかりの地を訪れた杜甫が、「悲風我がために起こり、激烈雄才を傷む[5]」と詠ずる詩句には陳子昂の生涯を己のそれと重ねて見ようとする姿勢

が伺われる。

盛唐の詩人たちの精神的な祖型となった陳子昂の文学は、「終古忠義を立つ、感遇遺篇あり」[6]と杜甫が称揚するごとく「感遇」詩三十八首をその中核とする。古来多くの先学によって論ぜられるこの連作は、しかしながら、そのすべてが制作年代を正確には規定できず、従ってその制作意図も推測の範囲を出ない。すなわちこの作品群は、詩人が意識したに違いない阮籍の「詠懐」詩群や、後の李白「古風」詩群と同じく、シンボリックな或いはメタフィジカルな表現のなかに彼らの「真意」を韜晦して、当路者に対する仮借のない告発の矛も、比喩と象徴と形而上学に転換している。それが幸いしてか阮籍は嵇康の如く刑死することを、李白も死罪及び夜郎への流刑を免れている。他方、陳子昂はその死因―つまり帰郷後の獄死という不可解な最期―に疑問が残されている。彼の「感遇」詩群を考えるについても、また詩人の最期の裏に潜んでいるものを考察するについても示唆的な作品が存在する。それは、ここに取り挙げようとする「薊丘覧古」七首の作品群である。

一

陳子昂は龍朔元年（六六一年）に生まれ、長安二年（七〇二年）に没している。彼がこの世に生を享けた時、則天武后はすでに三十八歳であり、高宗の皇后王氏を蹴落として自らが皇后に冊立されてから五年を経ていて、実権を掌握しつつあった。それがはっきりした形をとるのは、麟徳元年（六六四年）上官儀による武后廃立失敗を契機とした皇帝の傀儡化である。陳子昂四歳のときであった。また、詩人は聖暦元年（六九八年）帰郷し、四年後の長安二年（七〇二年）没しているが、則天武后が病のため実権を奪われて中宗李顕が即位し、唐室が

回復するのが神龍元年（七〇五年）である。つまり、陳子昂という詩人は、則天武后の世に生まれ、武后に仕え、武后に先立って世を去っているのである。彼にとって、その長くもない生涯のすべては武后の時代の中にあったのである。このことは陳子昂の文学と生涯を論ずるにあたって等閑視することができない事実である。古来則天武后が悪評のもとで語られることから、陳子昂に関しては出仕しながらもその政治に批判と抵抗を示したという面のみが強調されるきらいがあるが、詩人が文明元年（六八四年）に二十四歳の若さで麟台正字の官を奉じてから、十四年後に老父の扶養を理由に帰郷するまで、一貫して則天武后の政権に忠実に仕えたことは忘れてはならないことである。前掲の詩句で杜甫が「忠義」の語をもって称するのも、主としてその点を指しているのであると思われる。主君に誠心誠意尽くして、その過ちを死を賭して諫言するのは、士人の本分だからであり、諫言やそれに類する語をもってただちに政権への批判とするのは誤りである。

陳子昂は出仕の半ばにおいて武周革命を迎えることとなる。天授元年（六九〇年）九月国号を周に改したとき、彼は「上大周受命頌表」及び「大周受命頌」四章を武后に奉っている。これらの文は、強いられて書いたものでもなく、職務上書かねばならぬという性質のものでもない。官職は当時、右衛胄曹参軍にあったと思われるので、杜甫が「三大禮賦」を玄宗に奉じたのと似て、そこに何がしかの思惑があったのかも知れない。しかし、それらの文を平心に読んでみれば、三十歳の陳子昂の則天武后に対する率直な賛美と期待をそこに見てとることができる。後世どのように非難される政権であっても、それが世論を掌握する初期の段階においては、多くの人々に充分な可能性と期待感とを抱かせるものであって、それがなければ（悪を実行するにしても）強い政治力は獲得しえない。武后が高宗李治の皇后にのしあがったのも、実権を握り武后朝を開いたのも、そうなったのは唐室李氏の側に彼女に勝る人材が存在しなかったことにもよるが、逆に武后の側に唐室李氏により

継がれるはずのカリスマが存在していたのであると見ることもできる。それは何かといえば、山野を跋渉し唐朝を築きあげた太宗李世民の有していた骨太な実行力であった。高宗は即位にあたって、太宗が創業の労苦を忘れぬために制したという「破陣楽」を観るのを嫌い、舞楽を撤去させた[7]というほど軟弱であったが、武后の方は逆に次のごとき逸話をもつ。『資治通鑑』によれば、久視元年（七〇〇年）傲岸姑息な吉頊の抗弁に対して、「お前の言う事は聞き飽きた。くだくだ言うな！太宗に師子驄という名の馬があって、生きのいいこと誰も調教できるものがなかったが、朕が官女としてお側に仕えていたので太宗に言ってやった、『わたくしが手懐けることができます。しかし、三つのものを用います。一に鉄の鞭、二に鉄のつえ、三に匕首。鉄の鞭でたたいて馴れなければ鉄のつえで撃ち、それでも言うことをきかなければ匕首でその喉をかき切ってやります。』と。太宗は朕の心を壮とされた。今お前は朕の匕首を汚したいのか！」と一喝した[8]。その死の五年前のことである。つまり、武人政権としての唐朝の本色は、完全に武后一身によって担われてしまっていた訳である。太宗李世民が親征までして果たしえなかった高麗平定を成し遂げ、史書類書など万巻の書を修せしめる武后の文武に渉る実行力は、唐室李氏や門閥の反感を抑えこんで政権に多くの人心を集めた。陳子昂も積極的に関与した一人であった。武周政権を支えた人々にとって、唐朝成立後三十年で太宗が崩じたとき、前朝の隋と同じく唐朝が忽ちにして瓦解しないという保証はなかった訳であり、惰弱な高宗皇帝の皇后武氏に政治的な指導力と太宗の気概を継承する側面を見出し期待を寄せたとしても、それは自然な成りゆきであった。そのような期待感が、武周革命を許し、李敬業の反乱を挫折せしめた背景となっていると思われる。

しかしながら、血塗られた陰謀によって得られた外戚政権は、常に政権内外に恐怖感を齎らした。武后が東都洛陽に常駐した[9]のも、造仏造寺に熱中したのも、それが然らしめたものである。密告奨励による暗黒政治は

急速に人々の期待を失望と憎悪とに変えていったが、久視元年（七〇〇年）に、武后の右腕、太宗における魏徵のごとき存在であった狄仁傑が他界すると、雪崩をうって政権の自己崩壊が進むことになる。陳子昂が建安王武攸宜の北征の軍に従って幽州漁陽で「薊丘覧古」を詠じたのは、その三年前神功元年（六九七年）である。

二

陳子昂の「薊丘覧古」七首には序が付されている。

丁酉の歳、吾北征す。薊門より出でて燕の旧都を歴観するに、その城池覇迹すでに蕪没せり。乃ち慨然として仰いで歎き、昔　楽生鄒子の群賢の遊の盛なるを憶ふ。因りて薊丘に登り、七詩を作りて以ってこれを志るし、終南の盧居士に寄す。[10]

丁酉の歳つまり神功元年、詩人は契丹平定の武攸宜の軍幕にあった。現存する彼の文集にはこのとき武攸宜の代筆として書かれた公文書がいくつか収められている。武攸宜は陳子昂の諫言を斥け軍職もおとしめたが、敵方契丹の孫万栄の死によって凱旋することができた。しかし、この孫万栄は幽州を囲んだ際、唐朝に檄を発して「何ぞ我をして廬陵王に帰せざらしめん」と言って来た。[11] 廬陵王とは中宗李顕（哲）のことであり、武周革命にあたって母親武后から廃され幽閉されていた。それがこの頃になると唐室の復帰を求める声が高まり、狄仁傑など重臣も強くそれを勧めた結果、翌年廬陵王を皇太子として立てることになり、武周革命も武后一代で終わることが確定するのだが、陳子昂が陣中で「薊丘覧古」を制作した時点においては恐らくそのような結末を確実に見透すことは困難であったろう。史書によれば武后は夢に自らが大きな鸚鵡となり、その両翼が折

れたのを狄仁傑に語り、両翼とは武后の二子であると諭されて武承嗣を太子に立てるのを断念したという。[12] 我が子を殺して皇后の座についた武后も、晩年再度己の子供を抹殺できなかったのは、ひとつには政治の流れが武后自身から再び唐室へと移りつつあることを承知していたからであろう。そのようなとき陳子昂の「薊丘覧古贈盧居士藏用并序」七首[13]は詠ぜられた。

軒轅臺

北登薊丘望　求古軒轅臺　應龍已不見　牧馬空黄埃　尚想廣成子　遺跡白雲隈

燕昭王

南登碣石館　遙望黄金臺　丘陵盡喬木　昭王安在哉　覇圖恨已矣　驅馬復歸來

樂生

王道已倫昧　戰國競貪兵　樂生何感激　仗義下齊城　雄圖覺中夭　遺歎寄阿衡

燕太子

秦王日無道　太子怨亦深　一聞田光義　匕首贈千金　其事雖不立　千載爲傷心

田光先生
自古皆有死　徇義良獨稀　奈何燕太子　尚使田生疑　伏劍誠已矣　感我涕沾衣

鄒子
大運淪三代　天人罕有窺　鄒子何寥廓　謾説九瀛垂　興亡已千載　今也則無推

郭隗
逢時獨爲貴　歴代非無才　隗君亦何幸　遂起黄金臺　□□□□□　□□□□□

この詩群は左思らの詠史詩（『文選』巻二十一所収）の系列に連なる。詠史詩は、史書を読み古の事跡を詠ずるものだが、陳子昂は古跡を眼前にして詠ずるゆえに、「覧古」と題したのだろう。建安王武攸宜の軍幕に従って遠征し、戦国末期の燕都の跡を高みから眺めての陳子昂の感慨は、この詩を贈られた盧蔵用の言葉を借りれば、「荊北楼に登り、昔の楽生（楽毅）燕昭（燕昭王）の事に感じ、詩数首を賦す。乃ち泫然として流涕し歌いて曰く、前に古人を見ず、後に来者を見ず、天地の悠悠たるを念い、独り愴然としてなみだ下ると。時人知らざるものなし。」という。[14] 詩人の悲憤慷慨が、言われるように「抑圧された才士の〝平ならざれば則ち鳴る〟という心情[15]」のみであったろうか。

驚かされるのは第四首「燕太子」である。

秦王日無道　秦王日び無道
太子怨亦深　太子怨みまた深し
一聞田光義　ひとたび田光の義を聞き
匕首贈千金　匕首千金を贈る
其事雖不立　その事立たずといへども
千載爲傷心　千載ために心を傷ましむ

右の冒頭二句は、秦始皇の暴虐なる政治に燕の太子丹が深く怨みをもったことを述べている。篇題から見て、この表面的な意味は誰の目にも明らかである。しかしながら、恐らく当時の人々はこの一首を見て、一種の戦慄に近いものを感じたことであろう。何故なら、「秦王」とは唐朝の人にとって太宗李世民を指す言葉であったからである。その太宗の死後五十年にもならぬ時点で発せられた右の二句は誠に衝撃的である。『文苑英華』など底本以外のテキストにあたっても、異文は一切見当たらない。ふつう唐ひとは、「秦王」が皇太子に立てられる前の李世民をいい、即位後も「秦王破陳楽」など李世民を指す言葉として用いられたので、始皇嬴政には「秦皇」の名を意識的に用いた。ところが、宋代に入ると本朝の皇帝ではないことから、この区別は忘れ去られたらしい。元来「秦王」は春秋戦国時代の秦の王を指す語として使われていて、それは当然の結果でもあった。今日目睹しうる宋代の唐詩刊本の中にすでに混同が見られるのは右の事情によるだろう。この陳子昂の詩句が、始皇を指すという表向きの表現の裏側に太宗を暗示していることを、唐ひとが敏感に掬い取っていたに違いないと推測できるのは、岑参（七一五？―七七〇年）の詩「終南雲際精舎尋法澄上人不遇歸高冠東潭石

淙望秦嶺微雨作貽友人」の、「石鼓時ありて鳴る、秦王いづくに在りや」の句をもって証明できると思われる。「秦王安在哉」は、右の陳子昂の「燕太子」の「秦王日無道」と「燕昭王」の「昭王安在哉」を意識したものだからである。『岑参集校注』（上海古籍出版社　一九八一年）の「秦王、唐太宗李世民即位前的封號」という注をまつまでもなく、唐の人々にとって語の響きが前後の王朝の人々とは異なるのである。

さらに、続く第二句の「太子怨亦深」の句も、前の句との関連でただならぬ意味をもってくる。表面的には、燕の太子丹が始皇に対して深い怨みを持つという意味であるが、右の如く前句の「秦王」を太宗李世民ととると、この句の含むところはいささか重大である。即ち、唐の高祖の武徳九年（六二六年）、実力と人望の集中した秦王世民は、兄で当時の皇太子李建成と斉王李元吉の嫉妬に身の危険を感じ、長孫無忌らとともに彼らを玄武門において弓で射殺した。所謂玄武門の変である。「秦王」が李世民を指せば当然「太子」とは李建成を意味することになってくる。「怨みまた深し」という言葉は、詠史詩に於て燕丹の心情を表すものとして、やや生々しすぎる。燕丹が刺客荊軻を秦始皇のもとに送ったのは、決して彼個人の怨念によるのではなく、自国燕を救うため最後に残された乾坤一擲の手段であった。その心情の表現として「怨」の字はそぐわない。「怨」とはきわめて個人的な無念の感情を指す言葉である。それでこそ「玉階怨」など女性の気持ちを表す言葉として古来多く用いられてもいるのである。陳子昂はやはりこの句の裏側に殺された李建成の身を想定していると言ってよいであろう。

ベルギーの画家ルネ・マグリットは、パイプの絵の画面に「これはパイプではない。」（Ceci n'est pas une pipe.）と書きつけた。無論それはキャンバスに描かれたパイプの形であり、パイプそのものではない。絵画に描かれた像をイメージとして受け取る鑑賞者の習性を逆手にとったウイットである。陳子昂の場合も、右の詩

において初めから秦始皇と燕太子丹を前面に押し出しているため、天地の悠悠たるを詠嘆する詠史の作として解するのが後世一般的であるが、右の事情は恐らく岑参以外の当時の読者も当然感得しえたものと思われる。このような詠史詩が、盧蔵用という終南山に隠棲していたらしい友人への贈与の詩として、さらに「丁酉」という干支を付して作られていることから、単に従軍の際に古跡に臨んで感慨を催したという通常の詩作動機を超えたものがあったと思われる。詩人は恐らく親友盧蔵用に自己の心情の理解を求めていたのであろう。[16] 出仕以来忠実に諫言を奏上し、武后の政権を支えようとした陳子昂も、自身心すすまぬ北征に参加し、無能な武攸宜の軍中で冷遇されているとき、千載のむかしに滅んだ燕の遺跡を目のあたりにして、唐王朝武周朝を貫く或る一筋の共通項に思い至ったのではなかろうか。つまり、己の仕える武后にしても、そのモデルたるべき太宗にしても、彼らが政権を握るにあたっては兄弟や実子という肉親を自らの手で殺し或いは幽閉しているという事実。そしてまた、飽くことのない領土拡大への野望。自己の青雲の志を実現すべき政権の終末をどこかで予感しつつ、その政権の出発点における本質的な罪悪を初めて感得した絶望感がこの二句に怨念のような叫びとなって埋め込まれているのだろう。

三

陳子昂は、この詩を作った年の秋の七月、武攸宜の軍とともに都に凱旋しているはずであり、従軍前の右拾遺の職に復している。そして、翌聖暦元年（六九八年）五月に「上蜀川安危事」三条を奉り、剣南諸州の疲弊を救い軍備を強化することを要請して、それが斥けられるとすぐ老父の扶養のためと称して帰郷を申し出てい

る。武后はそれを許し、右拾遺の在官待過のまま詩人は故郷梓州射洪県に帰った。だが父陳元敬が他界すると待っていたかのように県令の段簡が「文法に附会して」投獄し、家人が銭二十万の賄を贈って助けようとしたが、獄中に横死したという。盧蔵用は段簡が「貪暴残忍」で、その財産に目をつけてのこととしているが、在官待遇で故郷に帰った拾遺の職を、一県令がそこまで迫害するということは、たしかに奇妙に思われる。中唐の沈亜之は「上九江鄭使君書」に「喬（知之）讒に死に、陳（子昂）枉に死す。みな武三思の一時に情に嫉怒せしによる。」という。南宋の葉適は『習學記言序目』（巻四十一）に「子昂　名は朝廷に重く、（段）簡何人ぞ。なお二十万緡をもって少なしとなし、これを殺す。――恐らくは載するところ両らいまだ真ならざるなり。」[17]と記す。

明の胡震亨は次のようにいう。

嘗って怪しむ、陳射洪（子昂）拾遺を以って帰里するに、何ぞ県令の殺すところとなるに至るかと。のち沈亜之の「鄭使君に上つるの書」を読むに、云ふ、武三思　子昂の排擯すると疑ひ、ひそかに邑宰をして拉辱し非命に死せしむと。始めて大力の人主の使在るありて、故に此に至るを悟る。子昂もと武攸宜の幕属なり。釁の生ずる所必ず此より始まれり。[18]

韓理洲氏はその著『陳子昂研究』（上海古籍出版社　一九八八年）の中で右の諸説を紹介したのち次のように述べる。

近人岑仲勉も武三思が陳子昂を殺害した下手人であり、彼が手を下そうとした理由は、武氏一族の醜行を暴露するにちがいないと考えたからであるとしている。これら上掲の諸説は一応成り立たないわけではないが、手を下した犯人が武三思であるとするのは妥当さを欠いている。唐ひと張鷟は『朝野僉載』巻二の中で、

妾妓を奪われた喬知之を殺した犯人は武承嗣であって沈亜之のいう武三思ではないと言う。―陳子昂を殺害した犯人は、武氏集団の中の奸佞の徒であるとのみ言いうる。[19]

以上のように、歴代の説はすべて武承嗣および武三思という武后の甥たちに陳子昂殺害の下手人を帰してしまっている。はたしてそのように断じてしまってよいであろうか。

先ず、右に言う喬知之が武承嗣に奪われた美妾碧玉に「緑珠怨」の詩を寄せて自殺に至らしめ、怒った武承嗣によって族滅されたのは、神功元年（六九七年）のことである。そして、前述のごとく武后が甥どもの中から太子を立てることを断念したのが、翌聖暦元年の春二月である。武后によってやがて政権の頂点に立てられるという可能性を意識していたからこそ、そのような横暴が生まれたのであり、聖暦元年九月廬陵王李顯が皇太子として立てられたのちは、妾妓の怨みから在官帰里した陳子昂を県令を使って投獄し死に至らしめるということは、ほとんどありえないことである。

では陳子昂横死の背後にあるのはどのような人物であろうか。それを考えるにあたり先ず注目すべきは、前述のごとく帰里を願い出る直前に「上蜀川安危事」三条を奏していることである。聖暦元年五月十四日の日付をもつこの文のほか、彼の文集には「上蜀川軍事」「上益國事」の二文が見える。いずれもそれを奏した動機は、基本的には地方情勢への危機感であろうが、しかし彼のこの種の文が蜀に関して集中している理由は、自身の故郷であるからにほかならない。「富家」[20]と称される彼の生家の不安がこれらの文に力を込めさせたのであろう。父の陳元敬は飢饉の年には「粟万石を出して郷里に賑（ほどこ）した」というが、[21]それだけに迫り来る危機を

その子に伝えていたのであろう。父子の感じたものがどのような性質の危機であったか。陳子昂の横死の経緯を見ると、政治的なものであった可能性は否定できない。一県令たる段簡が地方の有力者であるはずの陳子昂を捕らえて死に至らしめるには、必ずその背後に何者か後楯があったと考えるのが自然である。その黒幕は、恐らく歴代諸家のいうような武承嗣や武三思ではないであろう。もし彼らが陳子昂に対して殺意を持ったとするならば、機会は帰里以前にいくらでもあったはずであり、陳子昂を気に入っていたらしい武后の目を憚ったとしても、帰郷後梓州にまで手をのばして県令に殺させるという手段は少々不自然である。

武周政権から見て、陳子昂という人物は逆にきわめて安全な人間であったはずである。若くして麟台正字に抜擢されてから、つねに忠実に武后の政治に奉仕して、二篇の〝受命頌〟にはその「赤心」が表れている「詩文に秀で、上疏諫言するが、『通鑑』の言葉を借りれば「辞婉にして意切、その論甚だ美なり」といい、[22]拾遺の官に甘んじて権柄を貪ろうとするところもない。狄仁傑のように武后の右腕となって直接政治の中枢を掌握していたわけでもないから、帰郷の願いはすぐに許されたわけであって、殺す必要など、状況的にはまったく考えられない。

他方、翻って当時武后政権の重圧のもとで多くの犠牲者を出しながら復権の時機を鶴首して待っていた唐室李氏とその周辺からすれば、陳子昂は逆にきわめて好ましからぬ人物であったはずである。武周革命を担い、賛美し、武后とその周辺に文筆をもって奉仕してきた陳子昂は、武后から見た駱賓王と同じく「反逆者」の位置にあった。その内面における思念のありようはともかく、一官僚として見た場合、彼は武后に忠実な知識人として映っていたことであろう。

そして、前述の「薊丘覧古」燕太子における「秦王日び無道、太子怨みまた深し」の二句は、それらの人々からすれば許し難いものがあったに違いない。しかしながら、彼が武后の膝元に居るあいだは決して手が出せなかったものと思われる。

郁賢皓氏の労作『唐刺史考』（江蘇古籍出版社　一九八七年）巻二二九によれば、この頃梓州刺史であったのは次の人々である。

（1）李震（徐震）

彼は太宗の功臣であり昭陵に陪葬された英国公李勣の長男であり、かつまた武后に対して反旗を翻し誅殺された李敬業の父である。『舊唐書』の伝によれば震は龍朔二年（六六二年）梓州刺史となり、麟徳二年（六六五年）没している。

（2）盧世矩

『新唐書』宰相世系表三上によると高宗期に梓慎七州の刺史を務めた。

（3）李崇敬

『新唐書』宗室世系表二上によると唐室蔡王房にあり、高宗武后の時、梓州刺史であった。

（4）白大威

『新唐書』宰相世系表五下によると武后の時、梓州刺史であった。中唐の詩人白居易の祖。

梓州という土地は武后期においても唐室李氏やそれに強く関わる人脈によって統治されていたようである。

ことに李勣の長子李震は、光宅元年（六八四年）にその子李敬業が誅殺されると墓を発かれて棺を壊され徐氏に復姓させられた人物である。梓州刺史であった時期は陳子昂の生誕よりも遡るが、梓州におけるこの一族に対する感情は恐らく熱いものがあったのではなかろうか。それは反対に武后政権への忠実な奉仕者陳子昂には厳しいものとなるはずである。

いずれにしても可能性の範囲を超えないものだが、射洪県令段簡の背後には、時の梓州刺史があったはずである。県令が刺史の意に反して帰里の高官を投獄、死に至らしめることはできないはずだからである。とすれば、陳子昂の命を奪ったのは、衰退期の武氏勢力ではなくて、唐室李氏復活が武后の高齢化とともに目前に見えて来た李氏或いはそれに呼応荷担する勢力であったとしてよいのではないだろうか。麟台正字陳子昂はかつて「宰相は陛下の腹心なり。刺史県令は陛下の手足なり」[23]と上疏した。しかし、彼が帰郷した時点で（あるいはそれ以前から）梓州一帯は武后の統治を実質的に離れていたのではあるまいか。先に述べた「上蜀川安危事」三条がそれを暗示するかのごとくである。

四

唐の太宗は漢の武帝とともに中国歴代の帝王を代表する存在である。後世帝王の鑑となった李世民も、帝位に行き着くために兄弟を自らの手で殺すという非情さを余儀なくされた。唐朝の人々にとって、それは太宗に対して恩義を感ずる性質の出来事であって、決して非難する筋合いの所行ではなかった。また、あれほど無理な、版図拡大以外に目的を他に見出しえない太宗の高麗東征も、唐朝に仕える或いは仕えようとする詩人たち

の作品の中には少数の隠微な形のもの以外に批判の言を見ない。それが王朝政治の世界であって、自己の属する政権中枢の汚点を客観的ないし批判的に言揚げすることはタブーである。呂思勉は「唐将帥之貪」という文の中で、名将と言われる唐朝の将軍のもとでも兵士が財宝の略奪をすることは常識であったことを述べ、次のようにいう。

太宗もまた武人なり。建成の太宗（の暗殺）を図るに、元吉に謂いて曰く、「秦王且に遍く諸妃に見えんとするに、彼の金宝多く賂を以ってこれに遺る、吾いずくんぞ箕踞して禍をうけんや」と。彼の秦王の金宝、果たして何ぞ自ら来らんや。[24]

このような逸話は、かりに詩人たちが知ったとしても言及することはありえない。

ところで、それではいったい陳子昂の「秦王日無道　太子怨亦深」の句はどのような意図のもとに詠ぜられたのであろうか。本文の「秦王」の語は先に述べたごとく異文がなく、かつ岑参の詩句からして唐代においても異同は恐らくなかったであろうことが確認できるゆえ、たしかに陳子昂自身用いていたに違いない。唐朝への帰属意識の薄れる唐末あたりならばともかく、初唐の時点において詩人が「秦王」の語を李世民への響き合いをまったく知らずに用いるということは考えられない。

では、陳子昂が太宗を人々に想起させる語「秦王」をわざわざ詠史詩の中で用いた意図は何であったか。ひとつの可能性は、ストレートな太宗への非難とする見方である。この場合、裏側に武后への間接的な阿諛のニュアンスを含むことになる。もうひとつは、太宗への非難を通じてその政治の後継を暗黙のうちに自認している武后への批判を意図しているという見方である。表面に始皇を置き、その裏側に太宗を蔵し、さらにその底に武后への絶望感を込めて廬陵王への同情に示していると見ることができる。そして、「秦王」の語における

太宗を指す可能性を十分に承知して用いているとすれば、この言揚げのありようは、太宗をいわば前朝の帝として扱っていると言えなくもない。

「秦王」を太宗を指して用いる例は、いくらも唐詩中に存在する。杜甫においても「折檻行」「送重表姪王殊評事使南海」「別張十三建封」の三詩を挙げることができるが、唐詩中に玄武門の変を暗示する表現は見当たらない。幽州の武攸宜の幕中でも、また、盧蔵用の居た洛陽・長安あたりでも、この詩は読まれたであろうから、陳子昂の立場はやはり武周政権でのもの言いとして意識されていたと思われる。

本来武后に忠実であって唐朝復権後指弾されても仕方がない立場にあったはずの人と文学が、没後唐朝の人々に受け容れられたのは、よく言われるように、士大夫の文学として「志」を詠ずるという詩の革新を成し遂げたことや、武后に諫言して唐の宗室を保全したことのほかに、下手をすればこの世から葬り去られかねなかった陳子昂の詩文を纏め、後世に残した盧蔵用の「陳氏別傳」一文の功績を見逃すことはできない。陳子昂の死後すぐに書かれたように見えるが、よく読んでみると、あれほど深く関わった則天武后のことは極く控えめにさらりと書かれていて、明らかに武后の目よりも唐朝の人々のそれを意識して書かれていることがわかる。盧蔵用自身中宗に仕え、のち黄門侍郎にまで至っている人であるから、この文も恐らく中宗期に書かれたか或いは改筆されたものであろう。

陳子昂が武三思によって殺されたとする説も、中唐の沈亜之という唐朝に仕える人によって提唱されたものであり、いずれにしても回復ののち隆盛をきわめた唐朝の視点に立っていることに注意しなくてはならない。そして、歴代の陳子昂の詩文に対する注釈や批評はいずれもその延長上にある。しかし、陳子昂自身、彼の死後唐王朝が巨大な帝国として二百年以上も継続するのを予想することは恐らくできなかったに違いない。清朝

の陳沆は『詩比興箋』巻二において、右の「燕太子」に箋して「諸王の挙兵して敗滅するを痛むなり」という。李敬業のような反乱を「忠義の鬼」としてその死は無駄でなかったことをいうとする解は、武后に仕えながら唐朝に忠義を保っていたから「忠義」である、いわば「弐心」の臣として称賛することになる。詠史詩は第一義的には古の事跡を詠ずるものであり、そこに蔵されるアレゴリーの解析は必ずしも一筋縄ではいかないところがある。「薊丘覧古」の場合、作者陳子昂を唐朝へのみ忠誠心を保った忠義の人として一方的に読み込んでしまうと、大きな誤りと矛盾に突きあたることになる。杜甫が、陳子昂を前述のように「忠義」の名をもって称したのは、（恐らく盧蔵用の「陳氏別傳」の「子昂　体弱くして忠義に感激す」の語が頭にあったのだろうが）その仕える主君に対し士人の本分を尽くした点をいうのであろう。唐室にあれほど忠誠を表明している杜甫だから「忠義」の語は陳子昂に関しても唐室に対する以外にないとしたら、武后に扈従しつづけた祖父杜審言を杜甫は恥じなければならないはずである。

「薊丘覧古」とその時代がどのように関わるかは、唐朝が回復され歴史上揺るぎない位置を占め、多くの詩人たちの忠誠心を集めている事実を前提にした盧蔵用以来の伝統的視点を一度清算して検討しなおすことが求められる。そのうえにこそ、「感遇」三十八首に見られる魏晋の人々のそれにも似た陳子昂の不安と思念の解釈がなされるべきである。

注

（1）陳子昂の生平についてはすべて近人羅庸『陳子昂年譜』による。

（2）高木正一「陳子昂と詩の革新」（吉川博士退休記念論集所収）参照。

(3) 杜甫A「冬到金華山觀因得故拾遺陳公學舍遺跡」　B「陳拾遺故宅」

(4) 『新唐書』巻一一六陸餘慶伝
雅善趙貞固・盧藏用・陳子昂・杜審言・宋之問・畢構・郭襲微・司馬承禎・釋懷一・時號「方外十友」。

(5) 杜甫前掲詩（A）

(6) 杜甫前掲詩（B）

(7) 『資治通鑑』唐紀高宗儀鳳二年條
「上初即位、不忍觀破陣樂、命撤之。」恐らくこれは『舊唐書』巻二九「音樂志」に見える「自破陣舞以下、皆雷太鼓、（中略）聲振百里、動蕩山谷。」と呼応するのであろう。

(8) 『資治通鑑』唐紀則天武后久視元年條
「無多言。太宗有馬名師子驄、肥逸無能調馭者。朕爲宮女侍側、言於太宗曰、妾能制之、然須三物、一鐵鞭、二鐵檛、三匕首。鐵鞭擊之不服、則以檛撾其首、又不服、則以匕首斷其喉。太宗壯朕之志。今日卿豈足汚朕匕首邪。」

(9) 『資治通鑑』唐紀高宗永徽六年の記述によれば、武后は惨殺した王氏蕭氏の亡霊を恐れて、終生洛陽に居り長安に移ろうとはしなかったという。

(10) 丁酉歳、吾北征。出自薊門、歴觀燕之舊都。其城池覇業跡已蕪没矣。乃慨然仰歎。憶昔樂生鄒子、群賢之遊盛矣。因登薊丘、作七詩以志之、寄終南盧居士。亦有軒轅遺跡也。

(11) 『資治通鑑』唐紀則天武后　聖曆元年條
孫萬榮之圍幽州也、移檄朝廷曰、「何不歸我廬陵王。」

(12) 同右
他日、又謂仁傑曰、「朕夢大鷄鵡兩翼皆折、何也。」對曰、「武者、陛下之姓、兩翼二子也。陛下起二子、則兩翼振矣。」太后由是無立承嗣三思之意。

(13) 引用は徐鵬校『陳子昂集』（中華書局　一九六〇年）による。『文苑英華』巻三〇一所収の文には少し異同があ

る。なお、それぞれの遺跡の地理的考証は中島敏夫氏「陳子昂『薊丘覧古』黄金臺等地理攷」（愛知大学論叢六九　一九八二年三月）参照

(14) 盧藏用「陳氏別傳」
登薊北樓、感昔樂生燕昭之事、賦詩數首。乃泫然流涕、而歌曰、前不見古人、後不見來者、念天地之悠悠、獨愴然而涕下。時人莫不知也。

(15) 王運熙「陳子昂和他的作品」（『文学遺産増刊』第四輯）

(16) 盧藏用が幽州出身であったことも陳子昂が彼に贈った理由のひとつであろう。

(17) 子昂名重朝廷。簡何人。猶以二十萬緡爲少而殺之。雖梁冀之惡不過。恐所載兩未眞也。

(18) 嘗怪陳射洪以拾遺歸里、何至爲県令所殺。后讀沈亞之《上鄭使君書》云、武三思疑子昂排擯、陰令邑宰拉辱、死非命。始悟有大力人主使在、故至此。子昂故武攸宜幕屬也、釁所生必自此始矣。（『唐音癸籤』巻二五）

(19) 近人岑仲勉亦認為、武三思是戕害陳子昂的凶手、他要下毒手的原因在于懐疑耿直的陳子昂會揭露諸武的醜行。上面這些意見、是不無道理的。不過、一定實指凶手是武三思、也是欠妥的。唐人張鷟在《朝野僉載》巻二中説、因奪妓妾殺害喬知之的凶手是武承嗣、不是沈亞之在前段引文中所説的武三思。—因此、只可以説、害死子昂的凶手是武氏集團中的奸佞之徒。（韓理洲『陳子昂研究』上海古籍出版社　一九八八年　六七頁）

(20) 『新唐書』巻一〇七陳子昂傳
子昂十八未知書、以富家子、尚氣決、弋博自如。

(21) 同右
父元敬、世高貲、歲穢飢、出粟萬石賑鄉里。

(22) 『資治通鑑』唐紀則天武后永昌元年條
三月壬申、太后問正字陳子昂、當今爲政之要、子昂退、上疏、（中略）辭婉意切、其論甚美、凡三千言。

(23) 『資治通鑑』唐紀則天武后垂拱元年條
麟臺正字射洪陳子昂上疏、（中略）曰「宰相、陛下之腹心。刺史縣令、陛下之手足。未有無腹心手足而能獨理者

也。」

(24) 太宗亦武人也。建成之圖太宗也、謂元吉曰：秦王且遍見諸妃、彼金寶多有以賂遺之也。吾安得箕踞受禍。彼秦王之金寶、果何自來哉。（『呂思勉讀史札記』上海古籍出版社　一九八二年　九九七頁）

第二節　「先天應令」考

はじめに

唐代詩文学を考える上で、社交の詩は大きな比重をもっているが、中でも帝王のような権力の中心にある人物と臣下との詩のやりとりは、概ね宴遊・行幸の場において制作され、その多くは美辞麗句の応酬であって、深刻な問答を孕んでいるというケースは稀である。しかしながら、歴史の転換点にあって重大な内容の交換が含まれる作品群も中には存在する。これから考察する三首の七言律詩も、有名な作品であり、選本にも採録されておりながら、最も重大な視点が今日に至るまで等閑視されてきた。それは、ひとつには詩が制作された時代の背景から切り離されて、選本のなかの個々の作品として読まれたこと、更には李商隠のような象徴的な表現を好む詩人の場合は或いは過剰にまで穿鑿される比喩表現の考察が、他の詩人の場合には、（千年もの歴史の厚みをもってしても）見逃されてきたためであろう。小稿で取りあげるのは、先天元年（七一二年）の春、当時睿宗皇帝の皇太子であった李隆基と、彼の腹心の部下張説と賈曽との応酬詩三首である。

一

ここに焦点をあてるのは、玄宗李隆基「春日出苑遊矚」（００１４９）張説[1]「奉和聖製春日出苑應制」（０４

６９６）賈曽[2]「奉和春日出苑矚目應令」（０３８５９）（数字は平岡武夫編『唐代の詩篇』における作品番号）の三首である。

これらの詩篇は後世別集などでそれぞれに単独で読まれたり、或いは明代の李攀龍『唐詩選』巻五に賈曽の一首のみが採られていて、我が国では比較的知られるが、清代に入ってからの暗記用テキストたる『唐詩三百首』には採録されないゆえに、中国では全くと言って良いほど顧みられなくなる。極く普通の御製と応制の詩篇として扱われるに止まっている。

しかしながら、『文苑英華』巻一七九（應令）では、「春日出苑遊」唐玄宗「和同前應令」張説「同前」賈曽（曽、英華誤作「會」）の順にこの三首を一カ所にまとめて収めており、古い時代にこれらが応酬の詩群として伝わっていたことは注目に値する。

いま、この『文苑英華』の文に概ね従って三首を左に掲げてみる。

春日出苑遊　　玄宗

三陽麗景早芳辰
四序家園物候新
梅花百般障去路
垂柳千條暗廻津
鳥驚直爲飛風葉
魚没都由怯岸人（魚『英華』作漁）

唯願聖主南山壽
何愁不賞萬年春

和同前應令　張説

禁林豔裔發青陽
春望逍遙出畫堂
雨洗亭皐千畝緑
風吹梅林一園香
鶴飛不去隨清管
魚躍飜來入綵航
睿賞歡承天保定
適文更覩日重光

同前　賈曾

銅龍曉闢問安廻（龍『英華』作闈）
金輅春遊博望開
渭水清光搖草樹
終南佳氣入樓臺

招賢已從商山客
託乘還徴鄴下才
臣在東周獨留滞
忻逢睿藻日邊來

一読してこの三首の詩が相互に関連しているらしい〝雰囲気〟は伝わってくる。取り分けて張説の作の言葉遣いは玄宗の詩のそれを意識しているのが感じられるし、賈曽の作には逆に洛陽滞在を明示する表現が含まれていることからして、三作の関連性は一応前提として考察を進めることができよう。

二

この三首の制作された先天元年という年がどういう年であるかといえば、いうまでもなく玄宗李隆基自身が太子から皇帝の座に就いた年である。時は李隆基の父、睿宗李旦の治政であったが、実権を握っていたのは則天武后の娘である太平公主であった。武后が高宗の皇后として実権を事実上手中に収めて以来、唐朝回復後も韋后・安楽公主および太平公主という三人の女性の手に権柄は押さえられていて、一応中宗によって復活した李氏政権はいずれもこれらの女性と側近によって左右されるものであった。そして、韋后を倒した臨淄王李隆基が景雲元年（七一〇年）睿宗の皇太子となると、人心は彼のもとに集まり、太平公主との間に緊張が生じることとなった。結果的には、二年後の先天元年に玄宗が帝位に就いた段階で太平公主に死を賜り、数十年にわ

たった皇后公主と側近による権柄横奪は終わりを告げ、皇帝と官僚による唐帝国本来の姿に返るのであるが、この時代の鋭角的な転換点に、右の三首は位置している。

張説は、武后の垂拱四年（六八八年）の進士で、最初武后に仕えて『三教珠英』の編纂にも加わったが、李隆基が睿宗の太子となると信任せられて侍読となり、やがて中書門下平章事に遷り、景雲二年（七一一年）の太平公主による玄宗離間の陰謀を睿宗に諫言して悟らしめた。[3] それで、これに危険を感じた太平公主は睿宗を動かして、のちに玄宗のクーデターの一翼を担うことになる郭元振[4]らとともに、水害旱害で土地の窮乏からくる政務多忙を理由に東都留守に任じ洛陽に遠ざけた。玄宗がこのクーデターを起こす直前、彼が洛陽から佩刀を献じて行動を促した逸話は有名である。[5]

賈曽は、もともと小官であったものが、高宗に見出されて監察御史に抜擢され、のちに景雲中に吏部員外郎から太子李隆基の舎人となった。そして張説が洛陽に遠ざけられた後も睿宗のもとで諫議大夫として、この先天元年正月、南郊に天地を祭る儀式を取り仕切っている。彼の子の賈至は詩人として名高い。

三

以上のような詩の制作時期を考えると、玄宗の詩は太子が春の日に宮中の苑に出て初春の長閑さを賞でながら今上皇帝の長寿を祝うという、表面的な意味合いの奥底に、一種の政治的なメッセージが含まれていると感得される。そもそも、この先天元年という年号は、西暦で言えば七一二年に当るが、先天の年号はその年の秋七月に、睿宗が突然退位を告げて上皇となり太子李隆基が皇帝の座に就くという、いわば父子示し合わせての

太平公主を「出し抜いた」政権交代によって八月に改元されたものである。この年の正月には「太極」と改元され、更に夏五月には「延和」と改元されているのである。従って、「先天應令」という詩題は、玄宗が即位後の年号を正月に遡って改元したことによるものである。

『張説年譜』（香港中文大學出版社　一九八四年）の著者陳祖言氏は、張説の右の詩をわざわざ前年の景雲二年（七一一年）に編年して、次のように言う、

景雲二年正月　相に入り、十月相を罷め、東都に分司す。知る先天の年の作にあらず、まさに是の年に繫ぐべし。[6]

この判断は、張説が右の事情で東都洛陽に追い払われたからこそ、この時点に作られたものであるという肝心要の事情を逆にとって、彼が長安にいなかった年に苑遊がありえないはずだから、一年前の年の応酬であろうと結論づけているわけで、本末転倒である。何故なら、賈曽の詩の第七句に、「臣　東周に在りてひとり滞留」とあることから、賈曽が正月、睿宗のもとで南郊に天地を祭ったのち、洛陽に赴いて都長安からもたらされた太子李隆基の詩を張説に示すとともに「應令」の作をともに制作していると思われるのである。

四

それでは、この三首の詩を先天元年春の「應令」の作として考えた場合、どのような意味合いが応酬詩として浮かび上がるだろうか。まず玄宗の詩から見てみよう。

1　めでたい新年正月、麗しい眺めには早くも芳ぐわしき香りみちる朝、

2　四季折々に美しい我が庭に新しい春がめぐりきた。
3　梅の花は爛漫として道を塞ぎ、
4　垂れ柳の多くの枝が渡し場を鬱蒼と取りまいている。
5　鳥が驚いて飛ぶのは風が樹々の葉を揺らすからだ、
6　魚が水に隠れるのは岸辺の人に怖じてなのだ。
7　願わくは今上陛下が南山の寿ならんことを。
8　万年の後も春を賞でられることは言うまでもない。

まことに悠揚せまらぬ皇太子の、春を祝ぐ苑遊の作であり、表面的な意味合いは極く普通のオケージョナルポエムである。しかし、これが右のように緊迫した政情下、長安の太子から、彼に佩刀を献じて意を伝えた左遷先の洛陽なる腹心張説たちに、或いは密かに送り届けられた詩であるとするならば、事はそう単純には片付けられないであろう。

それを考える前に、張説と賈曽の作を考えてみよう。その示唆するところから逆に玄宗の意図を推測できるのではないだろうか。

張説はいう、

1　禁中の麗しい方は春のおでましになり、
2　春景色に逍遥として美しい宮殿を出られる。
3　雨はあずまやの丘をどこまでも緑で包み、

4　風は梅と李の園いっぱいに香る。
5　鶴は空に舞って去らず妙なる楽の音に従い、
6　魚はとび跳ねて美しい御船に飛び来る。
7　かしこくも御遊は天の定めを慶び承けて、
8　めでたき御文に日の光をいや増すのを拝見いたします。

また、賈曽の詩には次のようにいう、

1　銅龍の門が暁に開いて天子に御挨拶ののち、
2　御車の太子は春のひろき眺めを賞でられる。
3　渭水の明るい光は草樹にそそぎ、
4　終南のめでたき山気は宮殿の高殿に入る。
5　太子には四皓が招かれて附き、
6　随伴の乗物には建安の七子が呼び寄せられた。
7　私はここ東都洛陽にひとり滞留しておりますが、
8　かしこき御詩を長安の都から思いがけずも賜り嬉しく存じます。

この二詩が、いずれも東都洛陽で玄宗から「春日出苑遊」の詩を受けて応令の作を奉ったものであること、それぞれの詩句に伺える。即ち、張説および賈曽の詩のいずれも第八句に見える「適文更覩日重光」の「適文」と、「忻逢睿藻日邊來」の「睿藻」とが玄宗の詩を指すこと間違いないからである。当時の習慣として、後世

のいう狭い意味での「和韻」の詩ではないから、脚韻を同じくしてはいないが、その雰囲気と語句の対応、さらに『文苑英華』に連作として採録されている事実、また「先天應令」の篇題が異文として伝えられる事実を勘案するとかなりの可能性で断定して差し支えないであろう。

五

では、皇太子の腹心として張説・賈曽の奉った詩句にはどのような意思が秘められているのだろうか。

まず張説の第七・八句の「睿賞　歡び承く天保の定まるを、遒文更に覩る日の光を重ぬるを」は、表面的に見れば、「皇太子殿下の春の御散策は今上陛下の御統治の安定を祝がれ、臣下として輝きのいや増すのを心嬉しく拝見致します」という意味合いに過ぎない。しかし、先に述べた政治的状況のコンテキストで読み取れば、この詩句には次のような解釈も含みうるであろう。

かしこき御判断により皇太子が（まもなく）天子となられることが定まり、そのお知らせを拝読して朝廷の安泰を嬉しく拝察申し上げます。御詩文に新しき天子の日の輝きがいや増すのを拝見申し上げます。

これは、その年の内に帝位委譲の方針が定まったことへの、張説から玄宗に対する賛同と忠誠心と祝辞の表明と読み取ることができる言辞ではあるまいか。

さらに、賈曽の頸聯は漢の高祖が太子を定める際に張良の発案で四人の隠者を招いた故事を用いている。表面的には李隆基に太子が定まったことを指しているのだろうが、それはすでに過去のことであり、詩句の裏には明らかに近い将来天子の座が新たに定まることを暗示していると見るべきである。そして、これらの推定の

上に立って玄宗の詩を読み返してみると、「三陽の麗景」「四序の家園」という言辞は、太子のそれというよりも天子のそれを意識していると言えなくもない。

次に注目すべきは、張説の詩と玄宗の詩における頸聯の響き合いである。「鶴は飛びて去らず清管に随い、魚は躍り飜び来たりて綵航に入る」は、玄宗の「鳥の驚くは直だ風葉の飛ぶがためなり、魚の没するは都て岸人に怯づに由る」と句造りが似る。意識的に呼応させているに違いない。この二つの対句には、春の水辺の情景に託して政局が暗に比喩されていると思われる。岸に遊ぶ貴人と鳥（鶴）と魚は、太平公主と睿宗と天子の座をそれぞれ暗示しているのではないか。そうだとすれば、張説のいうところの「清管」と「綵航」とは、おのずから玄宗を指すものであろう。ここに、君臣間の息の合った意思の疎通を見てとることが出来るように思われる。玄宗の暗示しようとした意味合いを張説が見事に受け止めて、それをひねって（暗黙のうちに予定されていた）睿宗の玄宗への禅譲が当年に行われることを張説らが洛陽において諾ない、忠誠を示した詩句なのであろう。無論、単に左遷先にある腹心の両人を太子李隆基が慰めた詩と見られないこともないが、しかし、単にそのような日常的な君臣の応酬と解するにしては、両都の距離と遊覧の内容と前後の政治的状況とが些か乖離しているのではあるまいか。暢気な遊山の詩を洛陽まで届けさせる必要も余裕も、当時の李隆基にはなかったはずである。

玄宗はここで、睿宗による張説らの東都出向が太平公主の差し金であり、天子も百官も公主の威光を恐れて従わざるを得なかっただけだと述べていることになり、そこからして目指すところが父睿宗の退位を前提とした保護と公主の打倒にあることが当然の帰結となること明白である。この意図を張説が確実に読み取っていた

からこそ、右の二句が出て来たのであり、その意味で玄宗自身、張説の思慮の深さと文学の才能を高く評価したであろうことは推測に難くない。事実、玄宗は「墨令答贊」[7]で「朗なること明鏡の如く、穆なること清風の若し。既に飾鶴を調し、又た雕龍を擅にす。則有り典あり、是れ文の雄と為すべし。」と賛辞を与えている。玄宗の最も親しんだ宰相として、張説への信任は、この「先天應令」の応酬を契機として決定的なものとなったのであろう。そこには単なる忠誠心と実務能力を問うだけでなく、詩文学を理解し、その奥底に潜む意図を見抜く力と、今度はそれに対する応答を、同等の技量でもって返すだけの筆力が要請されている。賈曽の応令詩と比較すれば、その差は歴然たるものがあると言えよう。無論、賈曽の作は、前にも述べたように李攀龍『唐詩選』に採録されて人口に膾炙したもので、その詩自体決して駄作ではありえないのだが、太子李隆基が苦境の中で与えた課題に対する答案としては、合格点を与えるべき作品ではあったものの、即位後の玄宗にとってみればそれ以上の詩文ではなかった、と言えるのではないか。

以上のような考察が成り立つならば、これら三詩は唐代詩史を通じてもっとも重大な形で詩文学が直接的に政治に関わった稀有な例として特筆すべき作品群である。[8]

六

太平公主は、李隆基が韋后をクーデターによって倒したごとく、政治上最も自己にとって「危険」な存在であることを承知していた。武后以後、側近政治が朝廷の「常道」となり、機能しなくなっていた天子および官僚の掌握を、太平公主の死後急速に回復した李隆基の「手足」としての腹心の部下達を、先ずは洛陽に追いや

った公主にしてみれば、一種の安堵感と同時に、次の手段への画策が準備されていたはずであって、李隆基自身微妙な立場に置かれていたに違いない。そして、この三詩がやりとりされた年の秋七月に、彗星が西の空に現れ、公主が占わせたところ「皇太子まさに天子となるべし」と術者は判断した。そこで睿宗は直ちに退位を告げた[9]、という。この電光石火ともいうべき退位と玄宗の即位による李隆基の政権奪取を、突然の出来事ながら太平公主が阻止できなかったのは、既に一度退位させられ、また帝位に返り咲くという歴代の帝王でも例の少ない体験を味わっている睿宗その人の不安あるいは先見の明があり、さらに前月の奚・契丹攻略の失敗[10]、それに急速に進展した李隆基への人心の傾斜とが大きく働いているのだろうが、三詩の作られた正月と思われる時点に於いては、恐らくもっと微妙な立場が李隆基の側にあったものと推測される。そこで、これらの作は「時の天子に対する謀反の志あり」という口実を太平公主の側に与えない配慮、さらに洛陽にいる腹心の部下への政権掌握の意図を伝達するという、内容・表現の両面で非常に難しい詩篇であったはずである。それを伝えきった玄宗も、またその意図を理解して応令の作を奉った張説・賈曽も見事というほかないが、恐らくはこれらの詩を看過したであろう太平公主の側に、文学の機微を読み取る識見がなかったとすれば、それは武后の娘として公主が不肖を恥じなければならぬことでもあろう。もしも、これが太平公主ではなくて詩人達と詩の応酬をしている武后その人であったなら、決して見逃すことはなかったに相違ないと思われるからである[11]。それを別の側面から見れば、太宗朝の詩壇から始まり、則天武后に引き継がれた朝廷詩壇の伝統が、この時期には玄宗李隆基の側に継承されていたということでもある。ここに唐代の政権と文化の関係が端無くも現れたという訳であるが、それは同時に、「文章は経国の大業」という魏晋からの伝統の証明でもあった。

七

ところで、睿宗と玄宗父子の間に密約があったのだろうか。あったとすれば如何なる形で行われたのであろうか。『睿宗實録』が佚亡している以上詳しくは分からないが、この前後の史実を『資治通鑑』の記述から拾ってみると、ある程度の推測がつくようにも思える。

中宗が韋后の意を受けた家臣によって毒殺され、殤帝を立てたのは、西暦七一〇年六月であった。翌月に臨淄王李隆基は劉幽求らとともに夜中玄武門から突入して韋后を倒したが、この劉幽求に諮って睿宗に帝位を継がせたのが、則天武后の娘の太平公主だった。そこからして睿宗の権柄も公主に牛耳られることとなったが、太子を立てる際に、睿宗に進言して平王李隆基を座に就けたのはやはり劉幽求であった。これほど李隆基が帝位に近づくのに功があった劉幽求も、開元年間に尚書左丞にまで昇るが「軽肆不恭」を理由に左遷されて赴任途中に卒している。これは、太平公主を李隆基が倒す際に功績のあった則天武后の旧臣郭元振が、軍楽を止めたことで玄宗の怒りをかい、斬罪に処せられるところを張説および劉幽求の働きによって罪を減ぜられ、赴任途中に卒したのと相似ていて、張説と賈曽が子の代まで玄宗朝で重用されたこととは対蹠的である。これら唐朝中枢に関わった臣下に対する玄宗の際だった処遇の違いの裏面に、「先天應令」の詩群が潜んでいるという可能性はあながち否定できないものがある。

ところで、睿宗と玄宗を結ぶもうひとりの人物がある。それは、唐代道教の大立者司馬承禎である。景雲二年十二月に睿宗は天台山から道士司馬承禎を招いている。その際次のような問答があったという[12]、

睿宗「身をおさめて無為であれば高士であるが、国をおさめるのはどうしたものか。」

承禎「国も身と変わりませぬ。物に順って自然であり、心に私するところが無ければ、天下はおさまります。」

この答えを嘉して睿宗は広成子の言葉も及ばないと褒め、都近くに住むのを勧めたが、司馬承禎は固く辞して天台山に還った。宰相の盧蔵用が終南山を指さして「此の中に佳処あり、何ぞ必ずしも天台のみならんや」と誘ったのに対して、承禎が「愚をもってこれを観れば、此れすなはち仕宦の捷径のみ」と喝破した逸話は有名である。盧蔵用が終南山の隠者から武后に見出されて俗界の権柄に足を突っ込み出世したのを痛罵した訳である。陳子昂の伝を書き、世に彼の業績を残した盧蔵用もやがて左遷と失意のうちの死を迎えることになる。

そして、玄宗が即位すると天台山から再び司馬承禎を呼び寄せた。ここに北魏北周の伝統を引く則天武后の仏教傾倒以後下火であった唐朝と道教との結びつきが極めて強固なものとなった。玄宗は即位後直ちに数十年にわたった側近政治を廃し、門下省中書省を中心とする皇帝と官僚による本来の政治体制に復したが、同時に道教の重視をも徹底し、開元元年（七一三年）に中書省を紫微省に、門下省を黄門省と改めたが、紫微令となったのは張説であった。そして玄宗の改革が一段落した開元九年（七二一年）に玄宗の招きにより入京した司馬承禎は、玄宗に道籙を授けたのち王屋山に住まい、その上言により玄宗は五岳に真君祠各一所を設けたことは広く知られる。この人物が睿宗と玄宗との政権交替に際して父子間の意思疎通に果たした役割の大きさは計り知れないものがあると思われる。

このように見てくると、玄宗は太子の頃から、数十年続いた則天武后とその亜流の女性による側近政治を廃し、太宗朝を模範とする唐朝という封建帝国本来の在りように返すことを最大の眼目としていたことが判然す

る。そして、恐らく睿宗と玄宗の間に立って意思を媒介したもののひとつが司馬承禎という道士であり、そしてもうひとつが、右に見た七言律詩という文学であったとは言えるであろう。

そうだとすれば、この「先天應令」における主従の詩の応酬こそ盛唐文学の幕開けと言うに相応しいと言えまいか。因みにこの期を代表する詩人杜甫が生れたのも、この先天元年であったが、玄宗の即位とともにそれまでの仏教中心から道教中心に、五言中心が七言中心へと世の趨勢も移っていったのである。

注

(1) 張説（字説之）洛陽の人。『舊唐書』巻九七、『新唐書』巻一二五に伝。

(2) 賈曽　洛陽の人。『舊唐書』巻一九〇、『新唐書』巻一一九に伝。

(3) 『資治通鑑』巻二百一十唐紀二十六睿宗景雲二年正月條

(4) 郭元振（名は震）魏州貴郷の人。『舊唐書』巻九七、『新唐書』巻一二二に伝。

(5) 『資治通鑑』巻二百一十唐紀二十六玄宗開元元年六月條

(6) 景雲二年正月入相、十月罷、分司東都、知非先天年作、當繫是年。

(7) 「墨令答賛」四言は、明嘉靖刊『張説之文集』（『四部叢刊』初集所収）巻一において、この詩（篇題は「奉和春日出苑」）の後に置かれていて張説の作品として扱われているかのようである。しかし、内容からして玄宗がこの詩を賞でたものとして考えた方が良いだろう。吉川幸次郎氏「張説の伝記と文学」（『吉川幸次郎全集』第一一巻所収）参照。

(8) 張説・賈曽の二つの詩に共通して「睿」の文字が見えることは、玄宗即位後数年にて崩ずる睿宗の廟号と奇妙に一致する。

(9) 『資治通鑑』巻二百一十唐紀二十六玄宗　先天元年七月條

(10)『資治通鑑』巻二百一十唐紀二十六の玄宗先天元年條に見えるが、幽州大都督孫佺の軍が奚と契丹の軍に大敗している。

(11)『文苑英華』には、巻一七六の「同公主遊九龍潭」等数首を武后の作として収める。そしてこれらは後世、南宋の計有功『唐詩紀事』に武后の條で、天授二年の暗殺未遂事件にまつわる詩の逸話のコメントとして「大凡后之詩文、皆元萬頃・崔融輩爲之」というのを受けて、武后の作品をすべて代作のようにいう。しかし、北宋の太宗に仕えた樂史の『廣卓異記』巻二には、同じ逸話がほぼ同じ文章で採られているが、右の三句は見当たらない。恐らく計氏の付加した「さかしら」であろう。

(12)『資治通鑑』巻二百一十唐紀二十六睿宗景雲二年條

上曰、理身無爲則高矣、如理國何。對曰、國猶身也、順物自然而心無所私、則天下理矣。